

—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

アルジェリア：イスラーム的マグリブのアル=カーイダがマリでのフランス人記者2名殺害の
犯行声明を発表

2013年11月6日、モーリタニアの通信社であるサハラ・メディアは、イスラーム的マグリブのアル=カーイダの「アンサー部隊」を名乗る集団から2日に発生したマリ北部でのフランス人記者2名の殺害事件の犯行声明を受け取ったと報じた。死亡した両名は、マリ北部を取材中に何者かに連れ去られ、遺体で発見されていた。犯行声明は、両名の殺害を「マリ人に対するフランスの日常的な犯罪、アザワードのムスリムに対するアフリカ・国連部隊の行為」の結果と主張し、「フランスのオランド大統領とフランス人民が、今般の新十字軍遠征に対する反撃に支払うであろう税金（原文のママ）のごく一部だ」と表明し、今後も類似の襲撃事件を起こすであろうと示唆した。しかし、この事件においても犯行声明はイスラーム的マグリブのアル=カーイダをはじめとするイスラーム過激派諸派が用いている公式な経路ではなく、通信社が独自に入手する、という経路をとって発表された。また、日本時間の7日午後の段階で、イスラーム的マグリブのアル=カーイダからこの事件についての声明・論評などが発表された事実は確認されていない。

一方、サハラ地域での西洋人襲撃・誘拐事件では、ヌアクショット通信が10月末にイスラーム的マグリブのアル=カーイダがフランス人4名を解放したと報じていた。解放された4名は2010年9月にニジェールで誘拐された人々で、10月31日付『サフィール』紙は、解放のために2000万～2500万ユーロの身代金が支払われたと報じた。従って、ごく短期間の間に、イスラーム的マグリブのアル=カーイダが関与したとされるフランス人に対する誘拐事件が、生還・殺害という極端に異なる結果を残したことになり、同派がサハラ地域での外国人誘拐事件に対する方針を、「囚人解放・身代金奪取のための長期拘束」から「襲撃・殺害」に変更した可能性があるとの懸念を惹起する。

ここで問題になるのは、一連の人質解放、記者殺害のいずれについてもイスラーム的マグリブのアル=カーイダが公式に発表していないことである。同派が西洋人の誘拐を、フランスをはじめとする西洋諸国に対する脅迫を通じて何らかの政治的目的を達成する手段として行っているならば、事件のあらましや結末、そして自派の要求事項についてより広く周知する広報活動が必須となる。効果的な広報を行うためには、今般のような個別の報道機関への情報漏出よりも、誰もが声明などの全文に接することができるインターネットを通じた広報のほうが優れている。こうした観点からは、イスラーム的マグリブのアル=カーイダが、少なくとも広報部門において組織としての一体性・統率を喪失していることが明らかになる。この事実は、2013年1月のアルジェリアでの石油施設襲撃事件の際にも観察された。従って、今般の動きからは、イスラーム的マグリブのアル=カーイダの「脅威の増大」よりも、同派が「組織としては衰退している」ことのほうが強く示されているように思われる。

(イスラーム過激派モニター班)

◎本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 公益財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799